

研究発表2

話す・聞く“なかみ”の深化・拡充を

音声言語教育の目標の確認

中 淵 資料 に「音声言語教育の目標の確認」として反省的な確認を致しました。なぜこのようなことを書いたかと言いますと、次のような足下からの出発を忘れないでいたいというふうに考えたからです。今月（1996年9月）16日の朝日新聞の「天声人語」には、震災後の神戸の仮設住宅での敬老の日のことが書いてありました。その様子を見て天声人語の執筆者は、「アメリカやタイなどの外国にくらべ、日本の老人は隣近所との会話が際立って少ない」という調査がありました。黒田さん（という人がお世話しているようですが、その人）についてお年寄りを訪ね歩いていると、「会話の不足は命に直結するゆきしき問題なのだ、と実感させられる。」というふうに述べています。という意味で、生きていることとつながっている会話、生きることとつながる会話、生活とつながる会話、その会話を育てる教育から出発することを思ったからです。国際化社会とか情報化社会というふうにいきなり大きなことを目標にしていくというのではなく、まず足下から、現実から遊離することなく、私たちの生活と文化をしっかりとつなぎ合わせて、力強い音声言語教育の展開をしていくことを願います。そういうふうに思いました。もちろん、高度情報化社会とか国際化社会の到来、あるいはその中の一部が既に始まっていることを否定するものではありません。まず、足下からの出発を、というふうに考えたわけです。

音声言語能力と学習者の体験や知識との相関

「話す・聞く“なかみ”の深化・拡充」を目指したいという全体の主旨を述べるために、少し別のエピソードを紹介し、少し変化球になりますが、投げてみたいと思います。今日からちょうど1週間先の27日が日本では旧暦の八月十五夜で、中秋の名月です。日本人は古くからこの日の月を「月々に月見る月は多けれど、月見る月はこの月の月」と言って、宗教と娯楽の両面から愛でてきたわけです。ですからその日、空が曇ったり、雨が降ったりした場合は、「無月」というふうに言って、しかも雨が降った場合にはわざわざ「雨月」というふうに名前を付けて、月が見えないことを惜しんだのです。但し雲の上には煌々たる月があるということを想像したのだと思うのです。そういうことから、例えば兼好法師の「花は盛りに月はくまなきをのみ見るものかは」という思想も生まれました。日本での月を愛でる風習というのは更に発展しまして、およそ一ヶ月後の旧暦九月十三夜の月を、また「後の月」と称してその両方を愛でるようなところまで発展したわけです。

更につけ加えますと、中秋の名月には田畑で収穫されるいろいろな季節のものを供えますが、その中に例えば里芋などがあります。その里芋の皮を剥かずにそのままゆでたものを「衣かつぎ」と言っています。こういうことばは日本の季節のことばを集めた「季語集」である「俳句歳時記」にきちんと説明してあるわけです。「衣かつぎ」につきましてはゆで上がったものを塩や醤油につけて食べる。皮をかぶったままで出され、食べる時に付けている衣を脱がすようにするところから「衣かつぎ」という名前が生まれた。八月十五夜の月見に供えるものの一つであるが、夜食などに出されて風流で味わいのある食べ物である、という説明がされているわけです。

こういう中秋の名月のことを取り出しましたのは、一つは先ほどの神戸の仮設住宅の老人たちのグル・プのところで、先に述べたような月見などが企画されて、そしてそういう会話が交わされることを期待するからです。すなわち生活の中の心のゆとりを期待するからです。生活を基盤とし、文化と結びつくことを音声言語教育の成果として願っているということでもあります。いま一つは、全体の主旨である「話す・聞く“なかみ”の深化・拡充」ということです。私は自分の興味関心からたまたま中秋の名月ということを調べました。ですから、先の知識といいますが、体験、解釈も含んでいますが、そういうことを話すことができたわけです。人は誰しも自分の興味関心のあることで体験や知識が豊かであれば、その事柄について話すことができます。また自ら話さないでもそういうことを聞かれれば答えることができますし、また聞く側にもそういう体験や知識があれば、あるいは聞く側の心得があれば一層豊かな話を相手から聞き出すことができるというわけです。

実践事例に見る音声言語能力

資料 には実践事例として小学校5年生のスピ・チの例を挙げました。これはたまたま「音風景百選」という企画がございまして、自分が大切にしたい音とか匂いとか色の風景を、「音風景」として色とか匂いにまで拡大しまして、その風景を紹介してみようということで、子どもたちに取材させて、それを原稿化し、更にスピ・チにもっていくという実践だったわけです。

その中で古賀溪子さんという5年生の子どもさんですが、彼女が紹介するのは音風景で、「金比羅山というところの木の葉のざわめく音」というものを紹介しています。彼女が一番みんなに聞いてほしいのはそのざわめく音を大切にしたいということで、「わたしはこの音を聞くと心がほっとするからです。とても、それにとっても気持ちがよくなります。力がわいてくるようだからです。」「その音はどんな音かという、ザワザワとかカサカサカサとかサラサラサラとかいう、きれいな音です。」「こんびらさんっていうのは、八百近い階段があって、のぼります。のぼったら上に、お寺か神社かわすれてしまったけど、あります。」というふうに話を続けていっているわけです。子どもたちは兵庫県の社町というところで生活してまして、何も金比羅山でなくても木のざわめく音というのはあるわけです。それでも古賀さんが他ならぬ金比羅山を選んだのかということについての理由は、このスピ・チの中では十分説明されておりません。そうしますと当然そのスピ・チに対して聞き手が反応すべきは、なぜ古賀さんは社町にも木々のざわめく音はあるのに、なぜ金比羅山なのか、ということだと思います。それを尋ねる心をもって聞く。そうすると改めて金比羅山というものはどういうところであって、自分が訪ねていった時にどのように八百近い階段をのぼって行って、そういう宗教的な場所を、歴史的な勉強もしっかりと踏まえて考えていくと、聞き手もやはり古賀さんがそこを選んだのはよく分かる、というようにお互いの認識が深まっていくことがあるのではないかと思います。

そういうことでやはり話すことの一番の基本はどのような時代であっても自分が聞き、話すことの中身を持っているということだと思います。以上です。

上谷 どうもありがとうございました。それでは続きまして研究発表3に移ります。NHK日本語センタ - の杉本泰夫さんに発表をお願いいたします。

資料

音声言語教育の目標の確認

何のための音声言語教育かと問われれば、やはり「今とこれからの社会に生きていくため」と答えるほかはない。そう答えてみて、学校の学習者たちにとって「社会」とは何だろう、それにつづく「生きていく」とはどういうことだろうと、改めて考えてみる。

「社会」は、情報化社会、国際化社会等を念頭におくのが常識になっていようか。その常識を一度洗いなおしてみたい。学習者たちにとっての「社会」は、多くの場合、自分をとりまく仲間や学校、それに家庭や近隣の地域の範囲である。その範囲で、自己を表現し、他者を理解し、必要に応じて状況を改善しながら生きていく、そのことのために音声言語教育が必要なのである。学習者たちが、情報化社会、国際化社会等にまともに対応するときの音声言語能力はその実の場において演練すべきことであって、学校では、将来のための基礎・基本の育成に徹すればよいことである。

音声言語能力の基礎・基本

学校の学習者を念頭において、ごく一般化した能力を三つ掲げてみよう。

自分をとりまく状況（事象、情報など）をとらえ、その中で（その中から）自分はこう

思う、こうありたいという感想や意見を述べたり、状況の改善を主張したりして、自己を表現する力

客観的な状況（事象、情報など）をとらえ、それを説明したり、解釈したりして、仲間やまわりの人に伝達する力

仲間やまわりの人とともに、提起された話題・ことがらに反応し、関連する話題・ことがらを提供したり、感想や意見を述べたりして、談話世界を建設する力

更に、この一般化した能力の下位に求められる能力を考えてみよう。

- | | | | | | |
|----|----------|-----------------|--------------|-------|----------|
| 1) | 発音・発声力 | 語彙力 | 統語力 | 関係把握力 | 思考・感情発表力 |
| 2) | 音読・朗読力 | 事象説明力(事象描写力を含む) | 情報要約力 | 解釈説明力 | |
| 3) | 話題・問題提起力 | 質問力 | 標語力(評価力、批評力) | 討議力 | |

から までの下位能力は、1)に特徴的なもの、2)に特徴的なものというふうにあげたものであって、固定的なものとは考えていない。1)と2)と3)の関係については、1)・2)・3)という累層を考える。

資料 実践事例に見る音声言語能力

「話す内容を育てるスピーチの授業 『自分が大切にしたい音・色・におい風景を紹介しよう』

」(兵庫教育大学大学院 鈴木万里子氏授業、附属小学校第5学年、平成8年6月27日～7月9日)

わたしの名前は、古賀深子です。わたしの紹介するのは音風景で、こんぴらさんというところの木の葉がざわめく音です。

わたしが一番みんなに聞いてほしいのは、大切にしたい理由で、わたしはこの音を聞くと心がほっとするからです。とても、それにとっても気持ちがよくなります。力がわいてくるようだからです。その音はどんな音かという、ザワザワとかカサカサカサとかサラサラサラとかいう、とかというきれいな音です。

こんぴらさんっていうのは、八百近い階段があって、のぼります。のぼったら上に、お寺か神社かわすれてしまったけど、あります。(後半略)